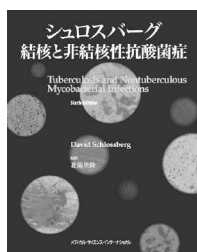


書評

[評者]
清田雅智
飯塚病院総合診療科
診療部長



シュロスバーグ 結核と非結核性抗酸菌症 Tuberculosis and Nontuberculous Mycobacterial Infections, 6th ed 北蘭英隆 監訳

● A4変・頁612 2016年5月
定価：本体 13,000 円＋税
[978-4-89592-850-2] MEDSi 刊

Mayo Clinic の感染症科に留学した際に、感染症の分野にはいろいろな成書が存在することを知った。“Mandell”は巷間認めるところであろう。この本が感染症一般を扱っているのに対し、さらに細分化した領域を扱う専門書が存在する。例えば、院内感染症であれば“Mayhall”が挙げられる。一方、抗酸菌感染症では本書が該当する。結核、非結核性抗酸菌症(nontuberculous mycobacterium : NTM)で悩むことがあるのなら、是非とも“Schlossberg”を紐解くべきである。

結核なんてと思っただけではない。疫学的に人口 10 万人あたり 10 人以下の発症が、結核の低蔓延国とされる。日本のデータは、WHO Global Tuberculosis Report 2016 で現在 17 人である。1977 年頃までは 100 人以上の高蔓延国であったので、当時までに結核に暴露された高齢者が、免疫の低下に伴い再活性化する恐れが十分あり、結核はこれからも忘れることはできない感染症である。

この本を読めば、新たな気づきがあるだろう。例えばツベルクリン反応の日米の差異がわかる。米国の陽性基準は細かいが、その理由もきちんと明記している。PPD の力価が日本とは異なる 5 TU を選択した理由や、発赤を含めないこともわかる。また結核性腹膜炎が肺外結核の 6 番目に多い疾患であることや、腹水検査で CA-125 が上昇しうることや、ADA 値が胸水とは異なる

り 36~40 IU/L がカットオフであることも知ることができる。こういう細かいことを、一々文献を引いて根拠を明確にしているところは、まさに成書たる所以である。

NTM の項目に至っては脱帽である。随分昔のことだが、他院からの症例コンサルトで *Mycobacterium peregrinum* が痰から検出されて、治療すべきか相談を受けたことがあった。普通 NTM は汚染菌が多いのであまり病原性はないと判断するだろうが、肺に空洞性病変を持つステロイド使用患者であったので本当に悩んだ。本書では、この菌が *Mycobacterium fortuitum* 群に属する迅速発育抗酸菌であることに加えて、どのような臨床症状を引き起こすかが書かれていた。この記述を読まなければ、自信を持って汚染菌とは判断できなかった。このような稀な菌が検出された時に、その臨床像がどういうものであるなどと書かれた本は日本では見たことがなかった。一言でいうと『すごい本』である。

評者にとって、本書は困った時の最後の砦的な心の支えだったので、留学後に英語版を購入し必要に迫られると愛読していた。この感動的に詳細な記述が、日本語版で読めるようになったことを心から感謝している。この本が各病院の図書館にあれば、日本の抗酸菌感染症の臨床レベルは格段に上がるだろう。